

線香

海外の貿易により、当時珍しかった薬種や香木がもたらされた堺では、香りの文化が息づきました。
その歴史を辿ってみましょう。

室町時代(1336年～)

応仁・文明の乱(1467～1477年)

応仁の乱で、京都が戦場になり都市機能を失いました。また、それまで遣明船(けんみんせん)の発着港であった兵庫津が西軍に占領されたため、堺津(さかいづ)が遣明船の発着港となり、国際貿易の起点になったのです。その後、南蛮貿易(なんばんぼうえき)により、様々な商品が取引され各種産業が堺を中心に発展してゆくことになります。

そこに含まれていた薬種や香木などを利用して堺で線香の製造がはじまりました。線香は、榎(ふ)の木の皮を乾燥させて粉にしたものをベースにして、主にアジア方面に自生する伽羅(きゃら)や白檀(びやくだん)などの香木やそのほかの香料を調合して独特の香りを作り出します。



線香の元となる、香木。当時は非常に貴重なものでした。
：撮影協力/(株)奥野晴明堂

江戸時代(1603年～)

江戸時代には、庶民の間にも仏教が浸透し、線香の需要が高まりました。香を扱う薬種問屋だけに許された「沈香屋」と称する線香を製造販売する店もあり、堺の線香が隆盛を誇っていたようです。寛永年間(1624～1644)には、線香・薫物の組合組織があったという記録も残っています。



代々受け継がれたという調査表。現在はほぼ使用されていないという。
：撮影協力/(株)奥野晴明堂

明治前期

仏壇の普及や流通の発達により、堺産の線香が全国へと出荷されるようになり、産業としても隆盛を誇っていました。

昭和初期

昭和初期まで堺は線香のシェア全国トップを占めていましたが、不幸にも第2次世界大戦の空襲の中心地に線香製造の会社が集中していたため、産業全体が大打撃を受けてしまいました。

平成～現在

戦後、線香の製造シェアは下がってしまいましたが、歴史に裏打ちされた香りの調合技術を生かした高品質な製品を製造し、国内外で愛され続けています。また、リラックスやリフレッシュを目的として、暮らしの中の香りを取り入れる観点から、新たな商品も生まれており、海外からの需要（じゅうよう）も高まっています。



現代において線香は、暮らしを香りで豊かにしています
:写真提供/(公財)堺市産業振興センター



今も伝統的な技法で作られる線香
:写真提供/(公財)堺市産業振興センター